

序

道端で思いがけない庭に出会うことがある。自然が庭をつくったのだ。そうは見えないけれど、こうした庭は野生のものだ。ある手がかり、たとえば特徴的な花や鮮やかな色彩のために、まわりの風景とは違ったものになっている。
この〈ずれ〉を調べてみよう。こうした庭を、犬や蠅みたいに違った角度から眺めてみることで。

思い浮かべているのはこんな風景だ――

ソローニユの森。一面に咲くジギタリスが林間の空地を緋色に染める。それはコナラ林が切り開かれた場所だ。

ギリシア、風吹く四月のパロス島。ハルマツタン²によって地面になでつけられたゼニアオイは絨毯のよう。そこにローマカミツレとヒナゲシが混ざっている。

南半球のウェリントン通り³。雌牛が食べ残した白いアルムの野原が広がる。その向こうではミュ

1 フランス中央部、サントル地域圏に広がる森林地帯。

2 アフリカ西海岸に東から吹きつける、砂塵混じりの乾燥した熱風。

3 ニュージールランド北島の道路。

ーレンベッキアの柔らかい茂みの上にノウゼンハレンが顔を覗かせる。

パーマストンノース⁴の海岸。ルピナス・アルボレウスとセネキオが仄かな朝の光に照らし出されている……。

土地の人に、誰がこれらの花を植えたのか尋ねてみても誰も知らない。花はずっとそこにあったという。ずっと？ だとすれば、どうしてメキシコ原産のノウゼンハレンがニュージーランドにあるのだろうか？ アフリカのアルムやインドのカンナが違う場所で、まるでそこが生来の地であるかのように生長している……。アジアのアジサイやマゼランのフクシアがレユニオン島⁵の高原にあり、オーストラリアやタスマニア⁶のユーカリノキは、乾燥した山岳地帯や条件の厳しい土地に植えられて、アフリカ、マダガスカル、アンデス山脈など、世界のいたるところで繁茂している。

人間は旅をしてきた。植物とともに。この大規模な混濁のなかで、久しく諸大陸に分断されていた花々は海を越えて出会い、新しい風景が誕生する。

植物はつくりこまれた庭から逃れて、ただ花を咲かせるのに適した地面だけを待ち望んでいる。あとは風が、動物が、機械が、種子をできる限り遠くへと運んでいく。

自然はこうして、とりなしてくるすべての媒介者を利用する。そしてこの組み合わせのゲームのなかで、人間という媒介者は最良の切り札なのだ。それなのに人間はそのことを知らずにいる。新しい庭は人間なしでつくられるのか？

放棄された土地は（放浪する）植物が好む土地であり、モデルなしでデッサンを描くための新しいページである。そこでは新しいことが起こるかもしれないし、エキゾティシズムも生まれそう
だ。

4 ニューゼーランド北島の都市。

5 アフリカ大陸南東沖のマダガスカル島からさらに東方に位置する小さな火山島。フランスの海外

6 オーストラリア南東沖に位置する島。オーストラリアの州のひとつを構成する。

〔荒地地〕はいつの時代にもあった。歴史的に見れば荒地地とは、人間の力が自然の前に屈したことを示すものだった。けれども違う見かたをしてみればどうだろう？ 荒地地とは、わたしたちが必要としている新しいページなのではないだろうか？

もつとも辺鄙な国、ときにもつとも貧しい国でまず見せられるのは、最新の高層ビルだろう。それは土地の征服を意味している。またフランスのような国では、自治体が荒地地を抱えると市長は不安になる。彼は荒地地を恥だと思っているのだ。これら二つの態度は、同じひとつの意味に帰着する。つまり、人間の力が読みとれなくなると、深刻な敗北とみなされるのだ。すぐ分かるおそらく、この発想は創造のあり方を極端に形式化してしまった。なぜなら、人間の優位を表現して読みとれるようにするのに別の方法がなかったからだ。こうした発想が生まれてくるのは、おそらく形——すなわち制御された形——というものが、とてつもない力を享受しているからだろう。この力は、未知のものが残っていると不快になり、それを警告する。だから揺るぎない構想にもとづいた伝統的庭園は、精神を落ち着かせ、（ノスタルジー）を涵養し、疑問を抱かせることがない。

わたしたちは、ほんとうはなにを恐れているのか？ むしろ、今なお、なにを恐れる必要があるのか？ 下草の濃密な陰や沼地の泥には無意識に追い払いたくなる不安があり、鮮明で明るいものは安心させ、残った部分にはあまねく不吉な妖精が満ちている……。二〇世紀も終わろうというのになお、わたしたちはロマン主義が重苦しくしてしまった単純な図式に足をとられているようにみえる。庭を変えるには、こうして伝えられてきたものを変えなければならぬ。それに、わたしたちはその方法を持っているように思えるのだ。今こそ、世界をつくり変えることで夢を築いてきたこのとらえ方——つまりどんなイメージを持っていたい——を、まるごと考え直すときである。

いったいなにが起こったというのか？

百年前まではまだ、人はあらゆる事物や現象を分類し、調査し、類縁性にしたがって再編していた。こうして、思考の基礎を果たしていた偏執的な類型化は究め尽くされた。そこでは植物も、それが位置づけられるべき系統だった秩序から逃れられなかつたのである。しかし今日、新しい事実が生じている。この事実はあらゆる分類の秩序を破壊し、法則のもつとも揺るぎない部分からも逸脱している。そして次に破壊されるのは、秩序だった思考の結果としての庭なのだ。

生物学的事実と呼びうるまでに達したそれは、おそらく後戻りできないほどに、あらゆる考えかたや着眼点を覆してしまった。十九世紀には生物学はなく、ただ生きた諸要素だけがあつた*。それなのに、今では諸要素の「あいだ」で起こることがよく意識されている。そうだとすると、生きた諸要素を利用するにあたって、それらのあいだに存在しうる結びつきがまったく予測できなかったとしても、もはや分類された諸要素を並置し、定義に押し込められて完全に切り離された個体の数々で空間を満たすことに甘んじてはいられない。庭がいまだにこの大変動をまぬがれているのは、かなり矛盾しているように思える。とはいえ庭は、少し複雑化したメッセージの本質を整理するために、慎重を期して、この大変動から距離をとっているだけなのではないだろうか？

構造物に頼ることが、今でも自然の〈無秩序〉をうまく制圧するたったひとつの方法になっているようだ。このやり方が採用されるということは、それとはまったく異なる本性をもつ生物の〈秩序〉が、まだ新しい発想をもたらさうとは感じられていなかったということを示している。それにしてもこの〈秩序〉は知られていない。まるで風景にたずさわる人々が、風景の理解を深める諸科学から締め出されてしまっているかのよう。なぜなのだろう。

* ミシェル・フーコー『言葉と物——人文科学の考古学』渡辺一民、佐々木明訳、新潮社、一九七四年 (Les mots et les choses: Une archéologie des sciences humaines, Paris, Gallimard, 1966)。「生物学」という用語は一八〇〇年にジャン・バティスト・ラマルクによって作られた。しかしこの語の用法が見られるようになるのは、十九世紀もずいぶん下ってからのことである。

国際修景家連盟^{*7}が、産業跡地の荒れ地と危機に瀕した風景とを同列に置いていることはとても示唆的だろう。というのもそれは、自然が地面を奪還していくことを荒廃と表現するのに等しいからだ。まったく逆なのに。人間はひとたび土地をえると、それを手放すことができないのだろうか？

しかしながら、有機的な力と知性的な力が出会い、せめぎあうことで、風景の最も力強いダイナミズムがつくられていく。

時間にゆだねることは、風景にチャンスを与えることだ。それは人間の跡を残しながらも、人間から解放されてもいるような風景を生み出すチャンスである。

人間がそう感じるのとは逆に、荒れ地は滅びゆくこととは無縁であり、生物はそれぞれの場所で一心不乱に生みだし続けていく。荒れ地を散策していると、たえずものごとを考え直さないといけなくなる。なぜならそこではあらゆることが起こり、もっとも大胆な推測でさえも覆されてしまうから。

慣れ親しんだ場所が荒れ地になっていくのを観察していると、いくつもの問いが生まれてくる。

そのどれもが、変化のダイナミズムにかかわるこんな問いだ――

どのような〈奪還〉の力が、この野生の場所を突き動かしているのか？

なぜ草花が消え、トゲ植物ばかりになったのだろうか？

ランド⁸は家畜に食べられて後退し、樹木が優勢になる。

開けた風景はまた閉じてしまうのだろうか？ ポカージュ⁹の〈極相〉は森林なのか？

結局のところ、何にもまして考えているのはこんな問いだ――

空間を獲得していくこの巨大な力を、庭に使うことはできないのだろうか？ しかしどんな庭

* I.F.L.A.: International Federation of Landscape Architects.

7 ランドスケープ・アーキテクト、造園家などと訳される "landscape architects" にたいして、本書では「修景家」をあてた。「修景」は景観や環境を損ねないよう修めること。「造園」にくらべて「造」の意味合いは劣るものの、「gardener」や「jardinier」と明確に区別でき、かつ「landscape」や「paysage」「つまり「景」を含んでいる点で優れていると考ええる。

8 ヒースに似る。酸性の貧瘠地で、草本と小低木が主体となった荒野。エリカ、カルナ、エニシダ、ツゲなどに覆われる。

9 境界林で囲い込んだ耕作地。フランス西部に特有の農村風景。土地の境界に沿って樹木が碁盤の目のように列植され、そのなかに平坦な耕作地が広がる。

に？

都会や道路から離れた人目につかない場所で、数アール¹⁰の土地が〈実験〉に供される。

チャンス——荒地はすでにそこにある。

狙い——植物の自然な流れにしたがうこと。場所に命を吹き込む生物の流れに入り込み、方向づけること。植物を完結したオブジェと考えず、その植物を存在させているコンテクストから切り離さないこと。

結果——変化の働きは庭の構想をたえず覆す。だからすべては庭師の手中にあり、庭師こそがコンセプトをつくりだす。〈動き〉が彼の手段、草花が彼の素材、生命が彼の認識だ。

いかなる形にも定められない存在として用意された庭。それがどんな見かけになるのか、想像するのは難しい。

わたしの考えでは、庭こそ形によって判断されるべきではない。むしろ存在することのある種の幸福、それを翻訳することができるかどうかで判断されるべきだろう。

ル 10
一アール＝一〇〇平方メートル